

アタッチメントとは

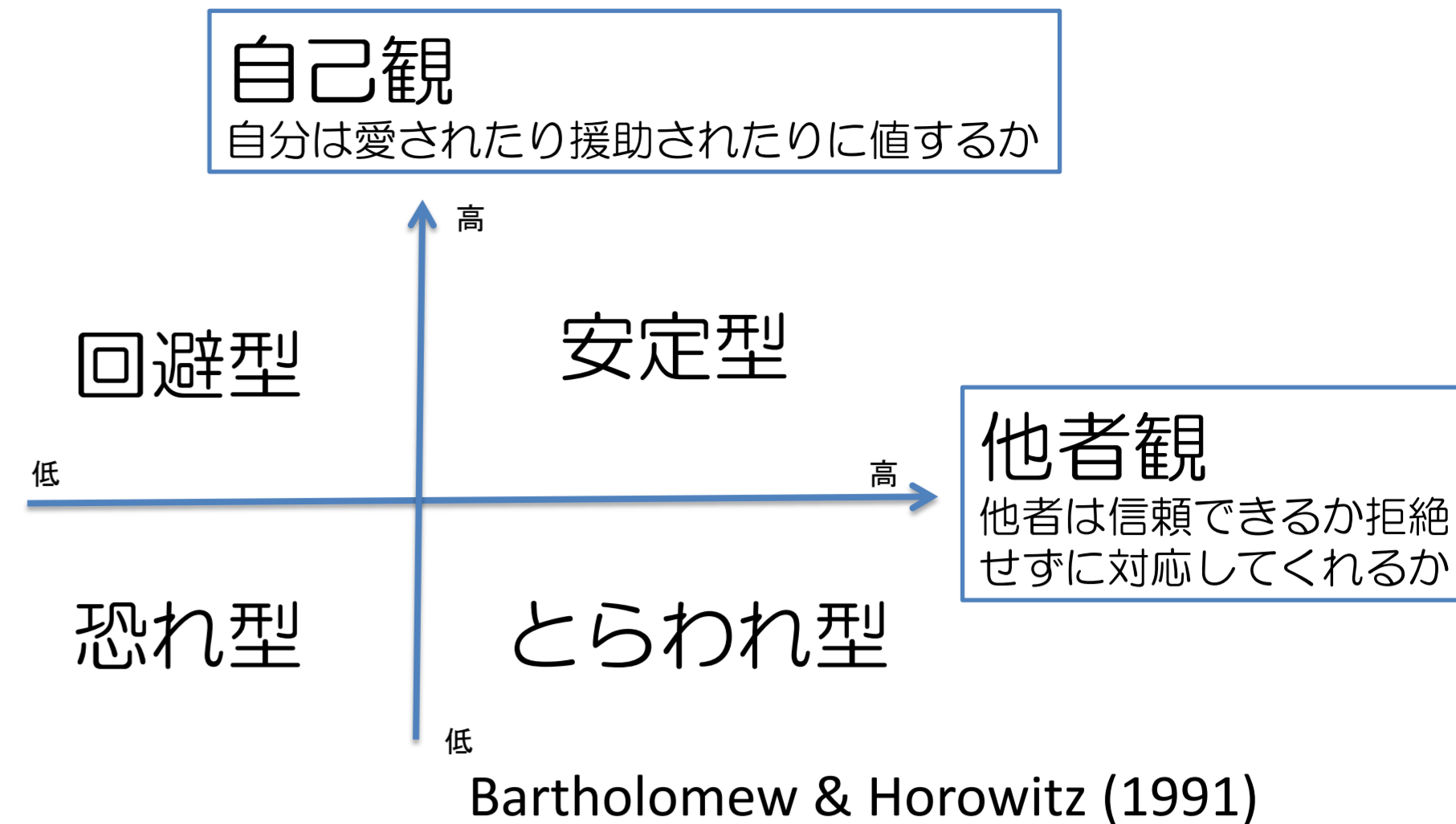
危機的な状況に際して、あるいは潜在的危機に備えて、特定の対象との近接を求め、またはこれを維持しようとする個体の傾性 (Bowlby, 1969)

問題と背景

近年はアタッチメント研究の対象が成人へと拡大している。乳幼児期は養育者(主に母親)とのほぼ1対1のアタッチメント関係であったが、発達とともにアタッチメント対象は広がりを見せることを指摘されている(村上・櫻井, 2010)。成人のアタッチメントは複数対象に向けられ、各アタッチメント対象に形成されるアタッチメント・スタイルに違いが見られることが示唆されながら、これまでアタッチメントの多様性に焦点をあてて検討されていない。そこで本研究では複数のアタッチメント対象に対する関係固有のアタッチメント・スタイルを測定する。

また、これまでのアタッチメントと心理的変数を検討した研究は、一般他者へのアタッチメントや母親とのアタッチメントなどの一つの関係に着目した研究が多い(丹羽, 2005; 金政, 2007)。そこで、本研究では関係固有のアタッチメント・スタイルと不安との関連を検討する。

アタッチメントの4タイプ



質問紙

調査対象: 大学生168名(平均年齢19.75, SD=1.37, 男性58名, 女性110名)

調査時期: 2012年9月~10月

①友人のアタッチメント対象の抽出 ネガティブな感情を持った状況に陥った場合にかかわりを持つとしたり、または実際にかかわりを持つ相手をアタッチメント対象とした。さらにアタッチメント対象となる友人のうち重要と考える人を1人~3人抽出した。分析には2人以上のアタッチメント対象となる友人を抽出したデータを使用した。

②日本語版関係尺度(加藤, 1998) 4つのアタッチメント・スタイルについて、それぞれの程度当てはまるかを7件法で尋ね、最後に最も当てはまるものの選択。それぞれ母親、父親、①で抽出した友人に対するアタッチメントの回答を求めた。

③日本語版State-Trait Anxiety Inventory(清水・今栄, 1981) 「現在、今感じている」状態不安と「普段、一般に感じている」特性不安を測定。

④ネガティブライフイベント得点 高比良(1998)の対人・達成領域別ライフイベント尺度のネガティブライフイベント項目から10項目を抽出・修正し使用した。過去3ヶ月でのライフイベント経験の有無をたずねた。

⑤その他

結果1 アタッチメント・スタイルの選択

母親、父親、友人1、友人2において、各アタッチメント・スタイルを選択した人数を記述した。

	母親		父親		友人1		友人2	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
安定	111	67.3	78	50.3	98	72.6	92	74.2
回避	41	24.8	57	36.8	13	9.6	11	8.9
とらわれ	4	2.4	4	2.6	21	15.6	15	12.1
恐れ	9	5.5	16	10.3	3	2.2	6	4.8
合計	165		155		135		124	

・母親では67%、父親では50%、友人1と友人2では70%以上が安定型を選択した。
・母親と父親では回避型が2番目に多かった。

母親と父親のアタッチメント・スタイルで χ^2 検定を行った。

各セルの人数が少ないため、回避型、とらわれ型、恐れ型はまとめて不安定型とした。

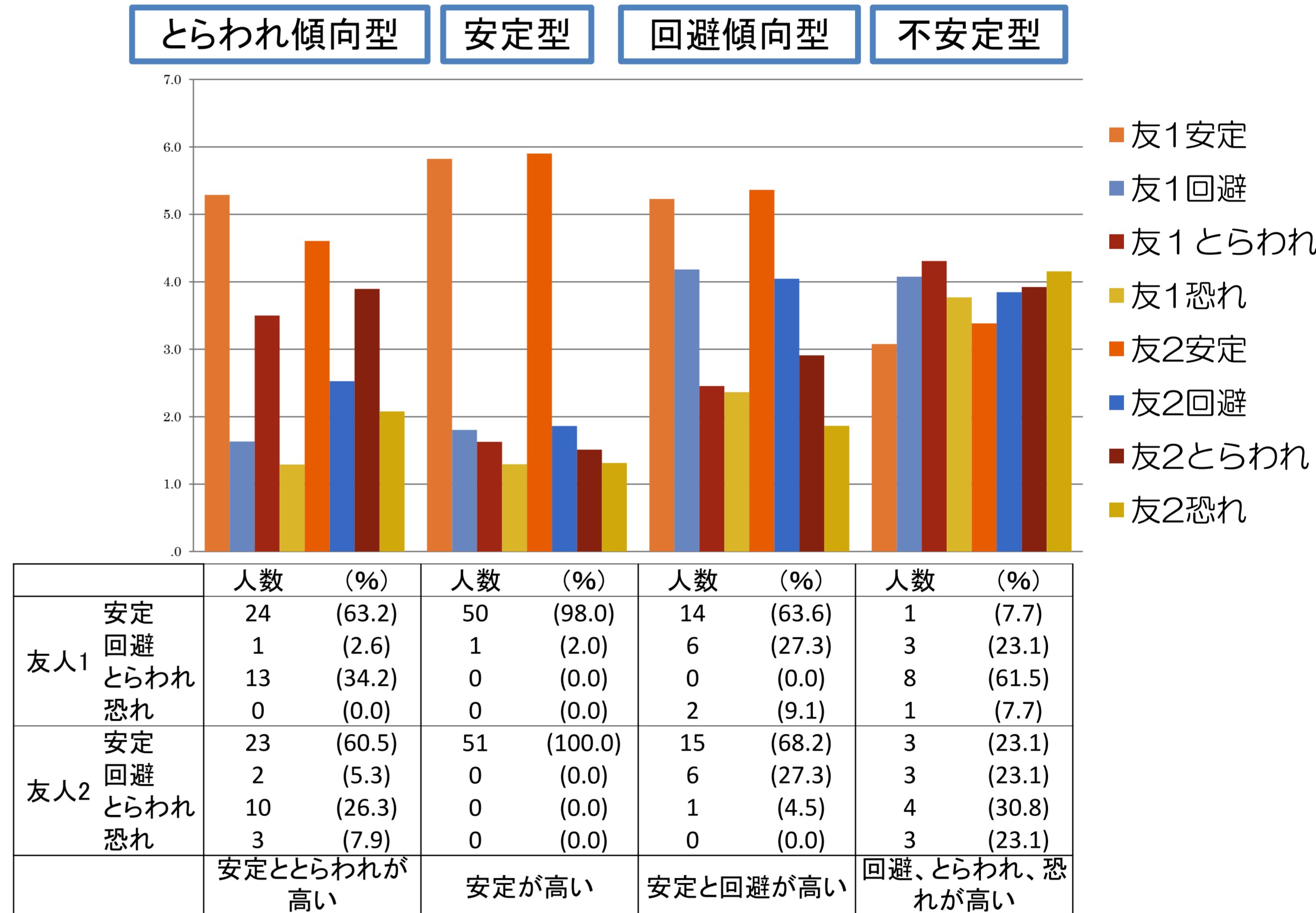
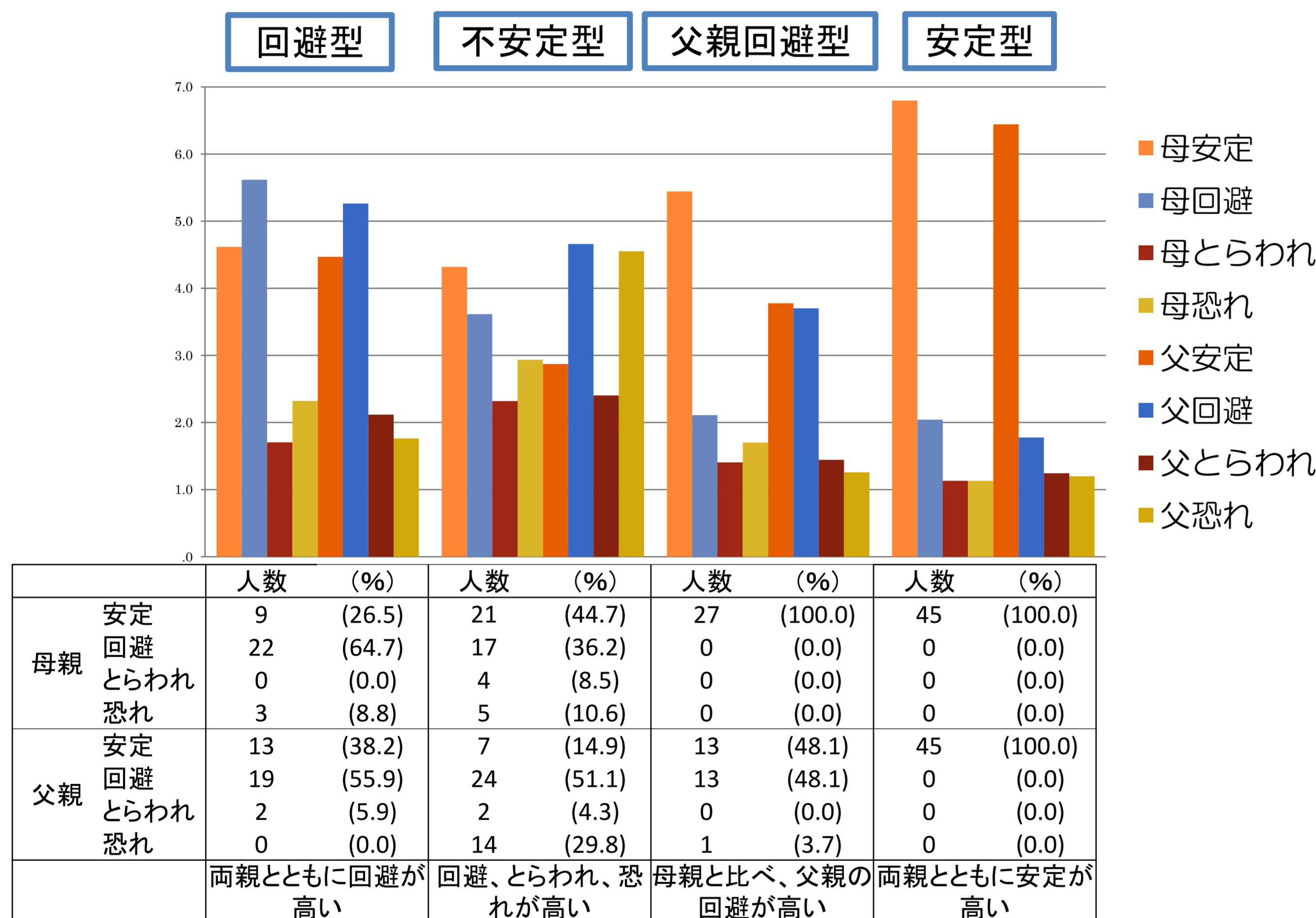
		父親		合計	
		安定型	不安定型		
母親	安定型	人数(%)	71 (46.4)	31 (20.3)	102
		調整済み残差	6.5	-6.5	
	不安定型	人数(%)	7 (4.6)	44 (28.8)	51
		調整済み残差	-6.5	6.5	
	合計		78	75	153

・安定型と安定型、不安定型と不安定型の組み合わせが多い($\chi^2(1)=42.49$)。

注) パーセンテージは総和に対する割合を示す。

結果2 アタッチメント・スタイル得点による群分け

家族関係、友人関係においてそれぞれのどのようなアタッチメントの傾向を持つのか検討するため、アタッチメント・スタイル得点を用いてクラスター分析を行い群分けを行った。さらに各群で選択したアタッチメント・スタイルの人数と割合を記述した。



・結果1で家族関係において安定型と安定型の組み合わせが多いと示されたが、2つの関係でアタッチメント・スタイル得点の傾向が異なる群(父親回避群)が抽出された。
・友人関係でのみとらわれ得点が高い群が抽出された。
・アタッチメント対象として選んだ友人に対してアタッチメント・スタイルが回避型である群が抽出された。

結果3 アタッチメント・スタイルと不安

ネガティブライフイベント(NLE)得点の合計得点で高群(5~10点)と低群(0~4点)にわけて、上記で抽出されたクラスターと性別を独立変数、状態不安と特性不安を従属変数とする二要因分散分析を行った

家族	クラスター	性別	交互作用
NLE高群	状態不安	0.92	0.12
	特性不安	1.91	0.53
NLE低群	状態不安	1.37	0.41
	特性不安	0.71	3.08

友人	クラスター	性別	交互作用
NLE高群	状態不安	4.29**	0.01
	特性不安	2.75	0.00
NLE低群	状態不安	1.69	3.30
	特性不安	1.37	5.62*

・NLE高群で違いが見られた
→危機的状況でアタッチメント行動が活性化された
・状態不安でのみ、友人関係における回避傾向群が安定群より高い傾向
→回避傾向群は危機的状況で人を頼ろうとせず、自分で解決しようとするので、すぐに不安を解消できない
・友人関係に対するアタッチメント・スタイルで違いが見られた
・一方で家族関係での回避群では不安が高いことは示されなかった
→青年期の不安は友人関係で統制されるのでは。関係によってアタッチメント・スタイルの心理的影響が異なる可能性があるため、成人のアタッチメント研究では誰に対するアタッチメントが明確にする必要がある。

安藤の研究

安定したアタッチメントの形成に資する養育態度、家族関係、ソーシャルサポートなどについて興味をもっています。データは、妊娠期からの縦断研究(4つの県から広くとった母親データと、ハイリスク群の父母ペアデータ)を行っています。また、心理教育の介入研究も合わせて開始しています。

以下の図1,2は、第24回日本発達心理学会(2013年明治学院大学)で発表した成果の一部です。母親の被養育経験(安定したあたたかいケアを受けたことや探索行動が保障されたこと)と母親のアタッチメントスタイル、母親の子どもへの養育態度や他者に子どもを預けることへの不安が、子どもの内化行動(はずかしがりや、臆病である・自分のからにこもる等)や外化行動(かんしゃくをおこす、他の人や子どもをたたく等)などの行動の形成との関係について、仮説モデルを作成し、分析しました。母親の被養育経験が、自身のアタッチメントスタイルを媒介して自分の子どもへの養育態度に影響し、それが子どもの行動特性の形成に寄与していることを、ある程度示すことができたと考えています。

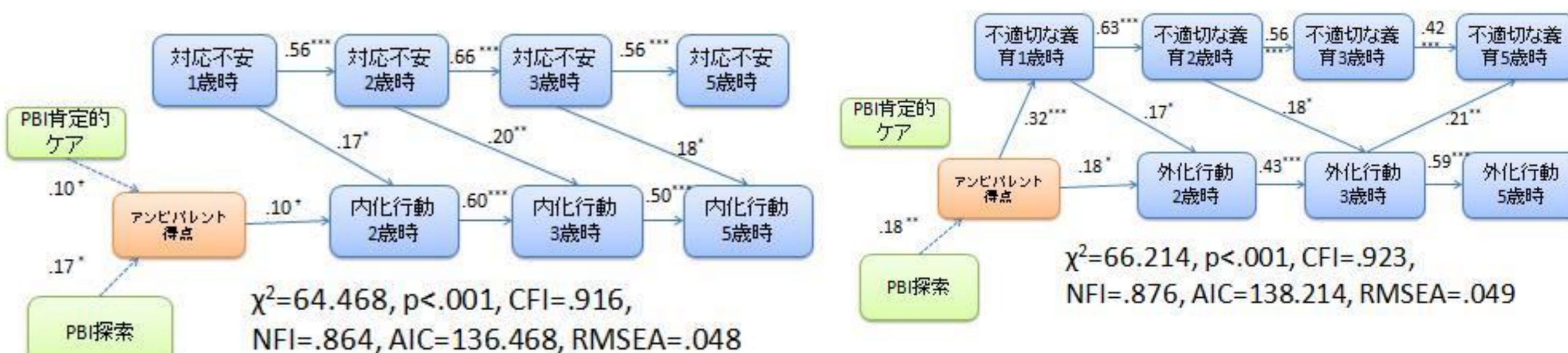


図1 被養育経験・アタッチメントスタイル・子どもを預ける意識・子どもの内化行動の関係についての探索的分析

図2 母親の被養育経験・アタッチメントスタイル・子どもへの養育態度・子どもの外化行動の関係についての探索的分析